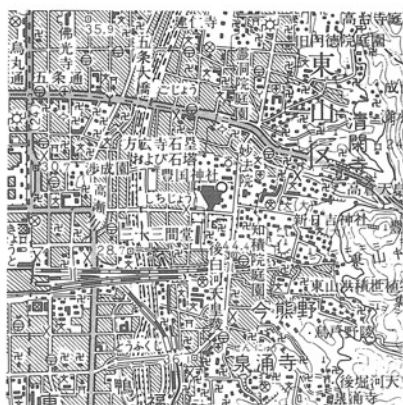


京都・六波羅政庁跡

ろくはらせいちよう

- 1 所在地 京都市東山区茶屋町
- 2 調査期間 一九九九年(平11)七月～二〇〇〇年三月
- 3 発掘機関 (財)京都市埋蔵文化財研究所
- 4 調査担当者 田中利津子・近藤知子・大立目 一
- 5 遺跡の種類 都城跡・邸宅跡・寺院跡
- 6 遺跡の年代 一二世紀末～一七世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(京都東南部)

本調査は、京都国立博物館建て替えに伴う調査で、今年度の調査対象地は博物館構内新館西側約二五七²m²(第九調査区)と南券売所部分の約七〇〇²m²(第一〇調査区)である。調査地点は平安時代後期の法住寺殿、鎌倉時代の六波羅政庁、桃山時代以降の方広寺などの推定地にあたっている。検出した主な遺構は、近世では豊臣秀頼期方広寺の路面や側溝、秀吉創建時方

広寺の道路敷きや溝、室町時代では溝や堀状遺構・土坑・柱穴、鎌倉時代では井戸・溝・柱穴、平安時代前期では溝・土坑などである。木簡は、第一〇調査区の南側で検出した室町時代の東西方向の堀状遺構から出土した。堀状遺構の南北幅は二m以上で調査区外の南に続き、東西の長さは一八・五m以上で調査区外の西に続く。深さは〇・五m以上である。肩口まで腐植土が堆積しており、木簡以外に土師器、輸入青磁・白磁、須恵器、焼締陶器などが出土している。

8 木簡の积文・内容

(1)



(横材)

35×(230)×2 061

上端左半分に曲線の切り込みがあり、その形状から卒塔婆と考えられる。下端は欠損している。裏面は上部に交叉する墨線があるが、文字にはならない。文字は横書きで、左から三文字は漢字である。二字おいて下段はへん・つくりの「口」で、その上段二文字目はかたかなの「マ」と読める。意味や、卒塔婆と文字との関係も不明。なお、木簡の积説にあたっては、梅花女子大の馬田綾子氏、京都大学の西山良平氏にご教示・ご協力いただいた。(田中利津子)

